

[月刊] 1988年6月18日第三種郵便物認可

トマ喰い虫

〒150 東京都渋谷区渋谷2-5-9 パル青山502
トマ喰い虫社

☎03(498)6095 大塚
045(563)5101 かつらぎ
FAX045(563)9907

郵便振替 東京6-136148

No. 71
91.9.20
定価 100円

平和船団レポート
インデペンデンスの入港に抗議する！

Aspiring sincerely to an international peace based on justice and order, the Japanese people forever renounce war as a sovereign right of the nation and the threat or use of force as means of settling international disputes. In order to accomplish the aim of the preceding paragraph, land, sea and air forces, as well as other war potential, will never be maintained. The right of belligerency of the state will not be recognized.

ARTICLE IX OF THE JAPANESE CONSTITUTION

平和

日本国憲法第9条●
戦争抵抗者同盟機関紙
NONVIOLENT ACTIVIST
91年9月号表紙より

米海軍資料が語る核空母の実態

新「基地協定」にゆれるフィリピン

[発行] トマホークの西配備を許すな！ 全国運動

●維持会員（月間会費）

●参加会員（月間会費）

●通信会員

団体 1口 2000円

団体 1口 1000円

年間 1口

個人 1口 1000円

個人 1口 500円

2000円

あなたも仲間！（会費は本誌購読料を含みます）



ゆっくりと向きを変える灰色の戦争の機械

平和船団
レポート

清未愛砂
学生/ピース・チェイン・リアクション

私たちが学生を中心に、一〇m×一〇mの布にピースマークを書く作業が始まった。海上デモの際、海面で米軍、マスコミにアピールするためのものだ。

下書きをして、赤色のペンキで塗り始めたが、とてつもなく大きなピースマークに皆、悪戦苦闘している。足の裏、服、顔：などにインクが飛び散る：などのハプニングに見舞われながら、午前三時すぎに、ようやくピースマークらしきものが仕上がっていった。しかし、あいにく、天候は雨。水性のペンキが雨でにじみ、一向に乾かない。途中、ストーブやドライヤーなども使用し、いろいろ策を練ったのだが……

起床予定の三時を大幅に過ぎて、ピースマーク作りが終了し、平和船団のゴムボートを膨らます作業を開始した。雨は徐々にひどく

米空母インデペンデンス横須賀入港予定日の前日である九月十日の夜。米軍の戦艦を目の前にして広がる臨海公園は、入港に反対する人々の熱気であふれていた。公園内に設置されたテント村には、冷たい雨が降り仕切っている。十一時をまわっているというのに、寝静まる気配は見られなかった。

雨の中での悪戦苦闘

入ってこないで！
と思わず叫んだ

当初の予定を大幅にすぎ、七時頃から、徐々にボートを出しはじめた。波が高く、危険なデモになった。八時すぎ、臨海公園に残った人々の声援を背に、公園前を旋回しながら、一四〇人が乗った五〇隻の平和船団は沖へ沖へと出ていった。クルーザーの上には、前日、東京・山手教会での湾岸戦争を告発する市民公聴会で講演した米国の元司法長官ラムゼイ・クラーク氏の姿が見える。平和船団は沖合の港の入り口に集まり、インデペンデンスの入港にそなえた。

九時三〇分、私たちの願いを無視するよううに灰色の巨大な空母の姿が目に入ってきた。巨大な空母のまわりを、入港を歓迎する自衛

なっていく。雨だけでなく、寒さも比例して増してきた。がちがちに口を震わせながら共同で作業を進めていく。全身をびしょりに濡らし、寒さをこらえながらの作業になった。空が白くなりはじめたころ、船団の準備が出来上がったが、悪天候のため、波が高く、危険をともなうため、予定時刻の六時過ぎてもボートを出せない状態になってしまった。海の状態をうかがいながら、電撃的に出発するチャンスを持った。

9・11 ヨコスカ ●●●
インデペンデンスの
入港に抗議！

戦争の機械に
立ち向かった
五〇隻の平和船団

●9月11日午前10時、空母インデペンデンスは横須賀港に入ってきた。核疑惑、艦載機の騒音被害、事故の恐怖そして軍事介入…ミッドウェー母港18年の負の遺産はそっくり引き継がれた。冷戦終結と軍縮と和解の潮流がここアジアにも芽生えつつある。空母の母港はその流れを阻む最大の要因になるだろう。韓国とともに国連に加入した朝鮮民主主義人民共和国に「核査察」を迫る日本政府は、まず、インデペンデンスの「核」を自らの責任において「査察」するべきではないのか。

●厚木基地周辺自治体は足並みをそろえて母港見直しを求めた。その声を踏みにじっての母港強行でもあった。民主主義はどこにあるのだろう。

●50隻の平和船団の抗議行動は大成功だった。11隻のボートを車に乗せてかけつけた広島・呉・岩国など全国の友人たち。雨と寒さとたたかいながら一睡もせずに行動を準備した50人あまりの仲間たち。船に乗った人、それを陸から支えた人、遠くから応援してくれた人々…。みんなの力でかちとった成功だった。ニュースは全国へ、そしてアメリカ本国へも伝えられた。

●9月11日は終りではなく、「始まり」の日だ。空母の母港は覆せる。平和と非暴力の世界に向かつて、船を出そう！ (た)



写真●今井明 その朝、平和憲法は50隻の小船とともにあった

る抗議の申し入れを行い、この日の行動を全て終えた。

私の想いは...

私個人として、インデペンデンス横須賀入港反対デモについて、考えを述べたいと思う。今回の海上デモに参加した理由というのは、純粹に「日本がなぜ、他国つまりこの場合でいうと米国だがーの母港にならなければならぬのか。おかしいではないか」という点から発せられたものであった。正直いって、我々が、いくら海上デモを行っても、インデペンデンスの入港を阻止することはできない。それは、十分に承知した上で参加だった。私は、横須賀市民ではなく、また基地県神奈川の県民でもない。インデペンデンスがミッドウエーに代わって入港してきても、厚木基地で行われるNLP（夜間離発着訓練）の騒音被害にあうこともない。ブルー・フォート（米軍専用空域）の下で、いつ、戦闘機が落ちてくるかわからないといった状況に置かれた人々よりも、ずっと恵まれた環境の中で生活している。そんな私が、こういったデモに参加するということは、直接的に被害を感じるのではない私に向けた私自身の手による内在的批判でもあるのだ。被害を受け

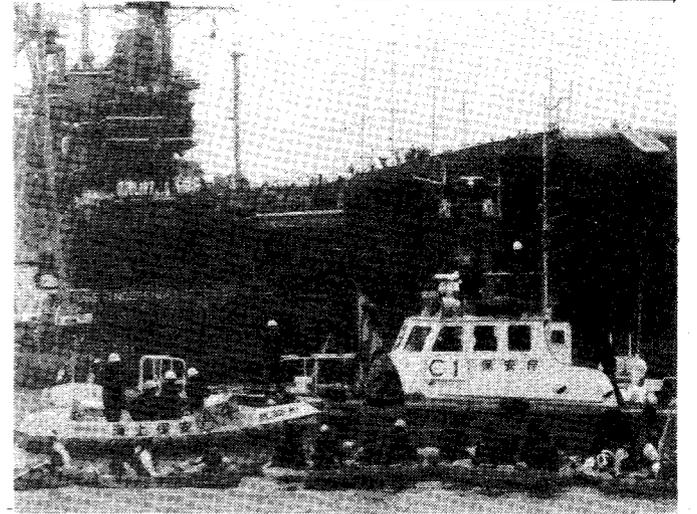


午後の陸上のデモには200人が参加

歌を歌いながら歩く



強風の中ヨットもがんばった



空母のすぐ近くまで迫って抗議のアピール

隊の護衛艦がとりまいていて、歓迎の放水が始まった。私にとって肉眼で見える空母はインデペンデンスが初めてだった。「入ってこないで！母港化反対。横須賀をこれ以上核基地にしないで！GO BACK, GO HOME！」などなどついつい興奮して私も抗議の声を張り上げてしまう。インデペンデンスが目前に迫ってきた。空母の上には兵士が整列して、我々の姿？を見ている。中には手を振っている兵士もいる。一体、どうい

りなのか。兵士各人を個人攻撃するつもりはないが、彼らが私たちの抗議行動をどういふふうを受け止めているのか気にせずにはいられない。あいにくの雨で、米軍にアピールするためのピースマークは、赤いペンキがにじみ、「日の丸」と化してしまい、使用不能となってしまった。しかし、平和船団はそれに代わるぐらい、いやそれ以上に自分たちなりの抗議の声をあげていった。

途中、インデペンデンスに近づこうとすると、海上保安庁の船が我々の小さなゴムボートに対して、乱暴に妨害してきた。「デモ指定地域からはずれている」というのだ。ただでなくとも、波が高く、危険な状態の中で行っているというのに、インデペンデンスに近づこうとしても、大型船で我々の進行を阻んでくる。中には保安庁の船に引っぱられて転覆させられたボートもあった。海中に体をほっぽり出される、メガネを海中に落とす...などの被害を受けた。

保安庁の妨害を振り切りながら、なんとかインデペンデンスに近寄り、日本語、英語の抗議のアピールを行い、十一時すぎ、臨海公園にもどっていった。前日から一睡もせず、食事もほとんど取らず、皆疲れ果てていたが、二時すぎから陸上デモ。そのあと代表団は市役所に行き、市長の「母港受け入れ」に対す



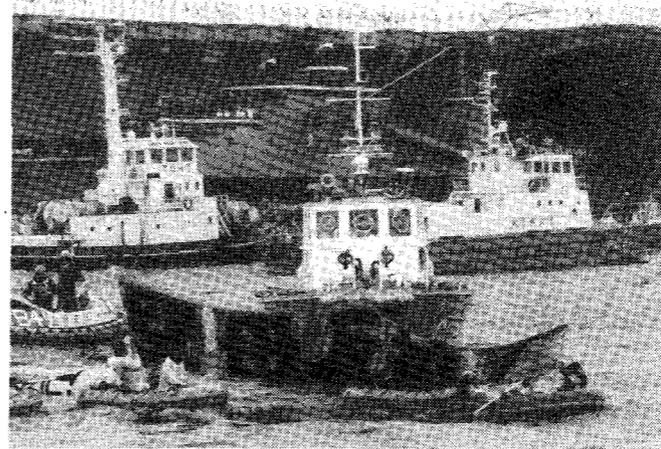
クルーザー「エスベランサ」の上のクラークさん

ボートを降りたクラーク元司法長官は記者に次のように語った（「毎日」神奈川版9/11。「イ号はすぐに本国に帰るべきだ。武装を解き船に積んでいる医薬品や食料をまずしい国々にそのまま運んでいくのがいい。出港反対の運動を本国でしてきたが、日本で入港反対の行動を見るのは同じ米国人として沈痛な気持ちだ」。また「日本の若い世代がゴムボートやヨットで行動を起こしているのを見て感動した」。

このあと、クラーク氏はあわただしく横須賀を離れ、東京の講演会に向かった。◆◆

他人ごと ではないから

島中
岩国市職労平和問題研究所



大横断幕をかかげる広島・呉・岩国の仲間たち

空母インディペンデンスの横須賀配備はもちろん横須賀だけの問題ではない。それは厚木自身、岩国自身の問題であり、そして軍事基地との関係のありようを問う直されるという意味で、日本という「国家」の枠内で生活する人間全体に関わる問題である。

とりわけ岩国は空母艦載機の着艦訓練基地を抱えていることから、直接に物理的被害および精神的被害（騒音、事故、事故への恐怖；等々）にさらされる状況にある。すべての面においてミッドウェーを一割上回るといわれる同艦は艦載機数においてもまたしかりミッドウェーの艦載機に加え、あらたにトムキャットなどが岩国での着艦訓練を行うことになり、訓練回数もまた一割増か？

その被害地（かつ基地の存在を許していること）によって加害地でもある。岩国におけるインディペンデンス配備への反対の動きは、一部の例外をのぞきこれまでの着艦訓練や岩国基地の存在自体に対する反対の動き同様、低調そのものである。一部労組と市民を中心とした反対の意思表示が芳うじてなされる以外は、直接の被害者である基地周辺住民などからの拒否（ノン！）の動きはほとんどみられないのではないかとと思う。

岩国での空母配備についての集會なども六

月十八日にNEPA訴訟についての集まりを持った以外はほとんど行えておらず、八月二十五日の呉集會、九月八日の広島集會への岩国からの「参加」という形をとるしかないという状態である。

それでも、やはり今回の配備の問題は直接的に岩国自身の問題であるという認識に立って、九月十一日の原水禁の阻止行動および平和船団の行動には岩国から数名が参加する予定である。

毎年五月五日に行われ、今年は湾岸戦争のために中止となった岩国基地開放デーが九月二十二日に実施される。普段は立ち入ることのできない基地内にこの日にかぎり市民の立ち入りを許し、人殺しの機械の陳列などをもつて米兵との「交流」を持つという、基地の存在への容認を無意識下に作り出そうとする一種の宣撫工作である。例年、岩国市の人口を上まわる見物客が基地に入り、目の当たりにする戦争の機会に喚声をあげる。

直接に被害を受けながらもそれを容認することによって、同時に加害の立場に立たされるをえない日本「国家」内における自らの存在のありよう、それを拒否していくところからしか「平和」も「民主主義」も見えてこないだろう。

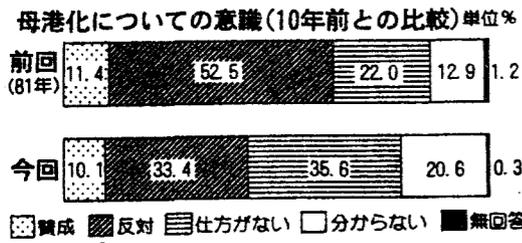
九月九日記 ◆

市民八八〇人に聞いた「インディペンデンス母港」 八月十八日（日）●非核市民宣言運動ヨコスカ

「あきらめ」「無関心」過半数

神奈川新聞（8.29）

10年で「反対」5割が3割へ イ号母港化でアンケート



反核・反基地の市民グループ「非核市民宣言運動・ヨコスカ」(新倉裕史代表)が二十八日、横須賀に米空母インディペンデンスの母港化についての市民アンケートの集計結果を発表した。空母の母港化について「仕方がない」「分からない」と答えた人が五・六・二%以上となり、十年前に同グループが行った調査と比べて、既成事実に対するあきらめ派や、無関心派が多くなっていることが分かった。

アンケートは、インディペンデンスへの交代を機に、母港化について市民の意識を探るのが狙い。十八日、京急横須賀中央駅前と汐入地区のダイエー前で、通行人から聞き取り調査を行い、二カ所で八百八十八人から回答を得た。

まず、母港化についての意識では「賛成」「反対」がそれぞれ一〇・一%、三三・四%だったが、「仕方がない」と答えた人が三五・六%と反対を上回り、「分からない」の二〇・六%と合わせて全体の半数を占めた。

いくら反対したってダメさ、と諦めている人々もはつきりと「反対だ」と言えるような希望と可能性を切りひらこう。そしてカギはやはり「自治体」なのだ。

非核市民宣言運動・ヨコスカでは八十二年六月に同アンケートを行っていたが、前回は「賛成」が三・三%、「反対」が四二・四%、「仕方がない」が三三・九%、「分からない」が一七・四%、「無回答」が二・九%だった。今回の調査では「賛成」が一〇・一%、「反対」が三三・四%、「仕方がない」が三五・六%、「分からない」が二〇・六%、「無回答」が〇・三%と、賛成と反対の合計が四三・五%と、十年前の四六・二%から減少している。

同会では「反対は大きく後退したが、賛成が増えていないことから、反対派が『仕方がない』『分からない』へ流れたと見られる。母港化が十八年にも及び、生まれた時にはすでにミッドウェーが母港化されていた若い世代にとって、基地のイメージが戦争に結びつかなくなっている。また、既成事実の重みに押されている人も多い」と分析している。

「仕方がない」と答えた人の意識を探るため、「インディペンデンス」の「新母港を前に市長は今何をすべきか」と、さらに意見を求めたところ、「反対を貫き、政府に強く働き掛けて」「非核を確立し、核廃絶を賭せ」「母港にならない方がいい」「基地の暗いイメージではなく、明るい街づくりを」「母港化に反対と解釈できる意見」が多かった。これらのことから、同会では「仕方がない」と答えた人が基地を容認しているとは思えない。今後は市民の母港化に対する反対を喚起することが運動の課題。自治体が、はつきりした姿勢を貫くことが必要だ」としている。

インデペンデンス 核空母の実態

反トマホーク全国運動とグリーンピース
あいついで調査結果を公表

核・化学兵器演習くりかえす

PCDS (太平洋軍備撤廃運動) とトマホークの配備を許すな! 全国運動は、米国の情報公開制度にもとづいて空母インデペンデンスの一九八八年一月から八九年五月までの「航海日誌」を入手し、分析結果を九月三日記者会見発表した。

インデペンデンスは八五年から三年かけて大規模なSLEP (耐用年数延長工事) を行った。工事費用は七億ドル。当時空母を新しく作るのにかかった費用は一五、二〇億ドルといわれている。インデペンデンスはこの工事で全く新しく生まれ変わった。航海日誌はこのSLEPの最終段階から始まる。この期間に次の四回の核兵器事故(ブローケン・アロー) 演習が行われた。



横須賀基地の建物に向けてスライドを上映! (9.9 グリーンピース・ジャパン) 「朝日」神奈川版9.10より

- ① 八八年一月二日 十三時四九分から一時五九分まで「核兵器の甲板への落下訓練」
 - ② 八八年四月一五日十三時〇八分から一時三十分まで。
 - ③ 八八年四月一七日十二時五三分から一時四十分まで。
 - ④ 八八年五月二十日九時四十分から一〇時十二分まで。
- この演習に近接して、核兵器の洋上補給と考えられる「特別洋上補給手順」のシミュレーションが二度行われている。「特別(Special)」とは核兵器を表す言葉だ。
- このほか、航海日誌には核・化学兵器による攻撃を想定した緊迫した訓練の様子が六回にわたって記録されている。
- インデペンデンスはミッドウェーよりはるかに近代化された核・化学戦争時代の空母なのだ。

ヨコスカで核テロ対策演習も

また事故も日常茶飯事に起っている。火災事故にいたっては四十九回。実に十日に一回である。

一方、国際的な環境保護団体グリーンピースは情報公開法によって入手した別の資料をもとに核空母の実態に迫る調査を行い、「空母インデペンデンスのヨコスカ母港と非核三原則」という報告書にまとめた(九月四日ワシントンで発表)。海軍の公式文書である「司令日誌(Command History) (一九七〇〜九〇) には、核兵器任務を遂行するための「海軍技術練度検査」(MTC) や「核兵器受け入れ検査」(MIA) に合格した記録や、「特殊兵器」(Special Weapon) の積みおろしなどの記録が随所に見られる。

特に注目したいのは、一九六五年九月三日の「航海日誌」である。インデペンデンスは横須賀に停泊していた。この日午前十一時二十分から十一時五十分にかけて「核兵器に対するテロ及び破壊工作警戒チーム演習」が行われている。二十六年前、インデペンデンスはすでに核を横須賀に持ち込んでいた。

- グリーンピース・ジャパンの連絡先は、〇三(五六八四)〇五五九

A CRITIQUE OF THE NEW BASE TREATY

比米新基地協定を批判する

一九九一・八・一

ローランド・G・シンブルム教授

非核フィリピン連合(NFPFC) 全国議長

九月十六日、フィリピン上院本会議は米軍基地の十年間継続使用を認める内容を盛り込んだ「比米友好協力安条約」の批准反対決議案を十二対十一で可決、新条約は否決された。現行の基地協定も同日で期限切れとなり、在比米軍基地は存続の法的根拠を失った。

アキノ政権は、大統領特権によって新条約を問う国民投票を行い、基地存続をはかるうとしている。フィリピンは今「政治的独立」と「経済基盤の確立」の間で大きく揺れ動いている。同時に新条約の今後の動向はアジア太平洋の軍縮の鍵を握る。米国はフィリピンに配備した戦力の日本など各地への分散を検討している。

編集部は全国組織「非核フィリピン連合(NFPFC)」による新条約への批判の文書(八月一日付け)を入手した。その全文を次号と連載で紹介する。
(訳 田巻一彦)

(上)

I 総論的批判

A 私たちが予期し、懸念していたとおり、新条約の未調印の草案は「友好協力および安全保障条約」という名のもとに、それが米軍部隊と施設のための協定であるという事実を覆い隠している。そうすることによってこの条約は、経済、科学技術、文化、教育、保健衛生といったあらゆる分野にわたる比米関係をフィリピン領土における米軍基地および部隊のプレゼンスの継続に強引に結びつけている。なぜ、これらの問題が米軍のプレゼンスと結びつけられなければならないのであろうか。わが国と関係を持つ世界の他のどの国もわが国領土に基地も軍隊も配備していない。

B 一九九一年六月の同草案はクラーク空軍基地をはじめとするいくつかの基地が削除さ

れていることを除けば、NFPFC (非核フィリピン連合) がかって入手した二月の草案と何らかわるところはない。「共同声明」と「本条約」からなる新草案は最低十年の基地の継続使用を保障額をあいまいにしたまま認めている。「本条約」は「友好協力安全保障条約」(それは上院の「友好協力安条約」を一部翻案したものだ)と名付けられているが、その実体は「軍事施設の配置と作戦手続きに関する協定」であり、「軍の地位に関する協定」である。

C ゲイシス国防省次官は四つの未解決の問題が残されていると言っているが、実はそれらは重要な問題ではない(実際にはささいな問題ですらある)。比米両国の代表部が早期に論議を決定させ協定に調印できないできたのは、この協定を上院に提案すれば否決が予想されるからである。

D 草案の本当の意味での「未解決の問題」は次のとおりである。

● フィリピン代表は「軍事施設および作戦手続に関する協定」は「本条約」の一部であり、上院の批准が必要だと主張している。これに対して米側は「本条約」と切り離し、行政協定として扱いたいとしている。

●協定の修正は米側からの文書によってのみ可能だとされ、フィリピン側の立場が明記されていない。

●フィリピン側には協定成立から九年目以前に協定を一方的に見直すことができる。とされているが、米側については明記されていない。米側には規定がない。つまりフィリピンの立場からは協定は十年目以降は効力を停止する。一方米側は、返却期間中は協定は有効であると主張している。

議会につめかけた基地存続支持派のデモ隊
(「朝日新聞」9.17号より)



読者から



●いつも現実と根差し事実をみつめての論稿、有益に拝見しています。アジア・太平洋の平和の危機―湾岸戦争後の世界の怪しいありやうに畏れを覚えます。米国元司法長官クラーク氏の来日、その証言に同感し、われわれも行動するべきです。

(森田宗一／弁護士・元判事／東京都)

●帝国書院の関東地方三〇万分之一の地図を開いてみる。掌底を横須賀に置いてみると人差し指は東葛飾郡のわが街にとどく。中指は荒川を越え、小指に立川市はかくれる。一六〇〇万分之一の地図ならモスクワからバルセロナまでが隠れる。その五〇分の一の面積の中に東京と横須賀はある。インデペンデンスは一六〇〇万分之一の世界を壊滅させられる。

(日比谷遊之介／千葉県我孫子市)

「カンパに添えて」

●いつも頑張ってくださいありがとうございます。私も七十一才ですが、昨年暮れ心筋梗塞と肺炎

横須賀市長横山和夫殿

インデペンデンス母港容認発言の 取り消しを求める要望書

一九九〇年九月十一日

本日九月十一日午前十時すぎ、十八年間横須賀を母港とした空母ミッドウェイの後継艦インデペンデンスが入港しました。私たちは五〇隻の「平和船団」をくり出し、新空母の入港に抗議の声をぶつけてきたところです。インデペンデンスの母港については長洲神奈川県知事をはじめ、厚木基地関係市長、そして逗子市長と足並みをそろえて「母港のみなおし」を政府に求めてきました。横山市長ただひとり母港を容認したのです。市民の失望はどんなに大きいかおわかりでしょうか。市長は厚木基地におけるNLP訓練についてどのくらい知っているのでしょうか。あるいは爆音を体験したことがあるのでしょうか。母港を受け入れるのなら、爆音ももっていつてほしいという厚木基地周辺住民の声をどれだけ真剣に聞こうとしているのでしょうか。インデペンデンスは非核の証明がないままヨコスカに入ってきました。ミッドウェイの十八年が語るように、空母の疑惑はすでに「世界の常識」なのです。

一九六五年にヨコスカに入港した際、インデペンデンスは核兵器に対するテロ破壊活動に対応する訓練を行っていることを環境保護団体グリーンピースが突き止めました。核を積んでいなくてなぜこうした訓練が必要なのでしょう。インデペンデンスはすでに核を持ち込んでいた！というわけです。その他、米軍住宅、艦載機の墜落、そして事故(インデペンデンスはヨコスカへの航行中爆発事故を起こしています)。何ひとつとも空母の母港を受け入れる理由は見つかりません。一刻も早く容認発言を撤回し、母港解消の公約を履行するよう強く申し入れます。

非核市民連帯会ヨコスカ/インデペンデンスは「いらぬ核兵器の撤去」を主張し、上野谷基地は「いらぬ核兵器の撤去」を主張し、川を非核にする市民連帯会/神奈川県学

おたより
まっています！



お便りを編集部にお寄せください。同封の読者カード、郵便振替の通信欄、手紙、原稿、FAX:どんな形でも結構です。紙面への感想、ご意見にかぎらず、自由な意見の交換の場にしたいと思っています。たった一枚のハガキが私たちをどんなに元気にしてくれることでしょうか！

(編集部)

原子力艦 入港情報

(38)

1991年8月16日～9月15日

P級=原子力潜水艦パーミット級

S級=原子力潜水艦スカージョン級

L級=原子力潜水艦ロサンゼルス級

- ◆8月16日 午前8時03分原潜バサディア(L級) 佐世保に入港
- ◇ 同日 午前8時35分原潜バサディア(L級) 佐世保を出港
- ◆ 同日 午前8時15分原潜ハドック(P級) 佐世保に入港
- ◇ 同日 午前8時44分原潜ハドック(P級) 佐世保を出港
- ◆8月19日 午後2時20分原潜ハドック(P級) 佐世保に入港
- ◇ 同日 午後2時43分原潜ハドック(P級) 佐世保を出港
- ◆ 同日 午後4時40分原潜バサディア(L級) 佐世保に入港
- ◆8月22日 午前11時06分原潜ハドック(P級) 横須賀に入港
- ◇8月23日 午前10時00分原潜バサディア(L級) 佐世保を出港
- ◆8月30日 午前10時32分原潜バサディア(L級) 横須賀に入港
- ◇9月4日 午前9時54分原潜バサディア(L級) 横須賀を出港
- ◆9月10日 午後4時02分原潜ラホヤ(L級) 横須賀に入港

●1991年1月1日から9月15日の各地への原子力艦入港回数は

横須賀	23回(うち原潜23回)
佐世保	6回(うち原潜6回)
ホワイトビーチ	2回(うち原潜2回)



会計報告 (91. 8. 16~9. 15)

[収入]

○前月からの繰越	221,257
經常繰越	371,257
借入金繰越	△150,000
○今月の収入	169,616
会費収入	100,000
内	
維持団体	24,000
維持個人	18,000
参加団体	0
参加個人	15,000
通信会員	43,000
カンパ収入	61,616
行動収入	8,000
資料収入	0
反核ホットライン収入	0

[支出]

●今月の支出	158,420
家賃(9月分)	30,000
水道光熱費	10,490
電話代	14,762
郵送費	40,815
文具代	10,745
印刷費	40,144
行動費*	6,120
資料経費	0
反核ホットライン経費	0
雑費	2,854
郵便振替等手数料	2,490
●次月への繰越	232,453
經常繰越	382,453
借入金繰越	△150,000

*行動収入、経費は原則としてプログラム毎の独立採算となっているため、これにあてはまらない一部の収支のみが經常会計に計上されます。

編集室から

●編集後記の四人衆(ま)(お)(た)(な)の(な)が、休暇をとって人知れず海外旅行中であることが発覚。卒論提出を目前に控えた(お)は何も知らずに事務所顔を顔を出したのが運のつき。彼を待ち受けていたのは(な)のやるべき仕事なのであった。(な)よ、おみやげ待ってるよ! (お)

●と、言うわけでインデペンデンスはやってきた。黒い大きなキカイが僕らの目の前を悠然と通過していった。地球規模で時代の歯車が回り続ける中、既成事実の積み重ねが、僕らから「元氣」を奪いさろうとしている。負けてなるかと今日もラッパを吹いたりする平和チンドンなのであった。(ま)

●インデペンデンス入港の前夜、降り止まぬ雨とどんどん過ぎていく時間に僕らは相当あせっていた。もうとうに日付がかわったところだったと思う、一組の熟年のご夫妻がテントをたずねて来られた。前日の午後のニュースでインデペンデンスことを知り、夜の列車で山梨を出発、最終電車での横須賀に着いたという。何のあてがあったわけではない。横須賀に行けば、誰かがいるだろう。やっぱりいきましたね、としみじみとうれしそうにおっしゃる。しみじみとうれしかったのは僕らのほうだ。その行動力に頭を下げつつ、平和運動、まだまだ捨てたもんじゃないぞ心の中で何度もつぶやいた。(た)

●平和船団レポート、清末さんをトップバッターに次号も掲載します。投稿歓迎。それから編集スタッフ、助っ人も引き続き募集中、経験不問。委細面談。(た)

月刊トマ喰い虫第七十一号

一九九一年九月二十日発行(通巻七十一号)

*発行 トマホークの配備を許すな! 全国運動
〒一五〇 東京都渋谷区渋谷一五一九
バル青山五〇二 トマ喰い虫社

〇三(三四九八)六〇九五
〇四五(五六三)五一〇一
FAX〇四五(五六三)九九〇七
郵便振替 東京六一三六一四八

*編集 トマ喰い虫編集委員会
*定価 一〇〇円(通信会員年間一〇〇〇円)